

147 受難と復活の予告

マルコによる福音書 10 : 32~45、マタイ 20 : 17~28、ルカ 18 : 31~34

▶イエス、三度自分の死と復活を予告する

(マルコによる福音書 10 : 32~34、マタイ 20 : 17~19、ルカ 18 : 31~34)

32 一行が(ユダヤの首都) エルサレムへ(危険をも顧みず)上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、(エルサレムに到着してから)自分の身に起ころうとしていることを話し始められた(→三回目の受難予告)。

→(リビング・バイブル) さて一行は、エルサレムを目指して進んで行きました。イエスが先頭で、弟子たちはあとから続きます。彼らは、恐れと不安な気持ちにかられていました。そこでイエスは、弟子たちをわきへ呼び、エルサレムに到着してからご自分の身に起こることを、もう一度、話して聞かせました。

→メシア受難の預言 イザヤ 52 : 13~53 : 12

33「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。 イエスの受難①~⑦と復活⑧ 人の子は祭司長たちや律法学者たちに①引き渡される。彼らは(最高法院の議会で)②死刑を宣告して異邦人(→ユダヤを支配していたローマ人)に③引き渡す。34 異邦人は人の子を④侮辱し、⑤唾をかけ、⑥鞭打ったうえで⑦殺す。そして、人の子は三日の後に⑧復活する。」

→祭司長やサドカイ派、ファリサイ派の指導者たちが議会(最高法院)を構成し、その地域の問題について決定する権利をローマ帝国から与えられていた(マタイ 14 : 53、55)。律法学者はユダヤ教の学者で、律法を研究し、その教えに沿って、いかに生きるかを説いていた。

→(NIV) 33“We are going up to Jerusalem,” he said, “and the Son of Man will be delivered over to the chief priests and the teachers of the law. They will condemn him to death and will hand him over to the Gentiles, 34who will mock him and spit on him, flog him and kill him. Three days later he will rise.”

→(NKJV) 33“Behold, we are going up to Jerusalem, and the Son of Man will be betrayed to the chief priests and to the scribes; and they will condemn Him to death and deliver Him to the Gentiles;

34and they will mock Him, and scourge Him, and spit on Him, and kill Him. And the third day He will rise again.”

→ルカによる福音書 18 : 34

十二人(の弟子たち)はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。

▶ヤコブとヨハネの願い(マルコによる福音書 10 : 35~45、マタイ 20 : 20~28)

35(イエスの言っていることが理解できていない) ゼベダイの子ヤコブ(=大ヤコブ)とヨハネが進み出て、イエスに言った。

「先生、お願いすること(→whatever we ask : 頼むこと、願うこと)をかなえていただきたいのですが。」

→(口語訳) さて、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたしたちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようお願いいたします」

→(リビング・バイブル) さて、ゼベダイの息子のヤコブとヨハネが来て、イエスにこっそりと頼みました。「先生、折り入ってお願いしたいことがあるのですが。」

→マタイによる福音書 20 : 20

そのとき、ゼベダイの息子たちの母(⑧サロメ)が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。

→イエスとゼベダイの子ヤコブ(=大ヤコブ)、そしてヨハネは従兄弟同士であり、縁故を利用し、ゼベダイの息子たちの母、つまりサロメは、イエスに自分の息子たちを何とかいい地位(ポジション)に付けてもらえるようお願いをした。

【参考】 イエスにまつわる親類関係

< 1 > マタイによる福音書 27 : 56 その中には、**②**マグダラのマリア、**①**ヤコブ(小ヤコブ)とヨセフの母マリア、**③**ゼベダイの子らの母がいた。

→この人は大工の息子ではないか。母親は**①**マリアといい、兄弟はヤコブ(小ヤコブ)、ヨセフ(=ヨセ)、シモン、ユダではないか。(マタイによる福音書 13:55)

< 2 > マルコによる福音書 15 : 40b その中には、**②**マグダラのマリア、**①**小ヤコブとヨセの母マリア、そして**③**サロメがいた。

< 3 > マルコによる福音書 16 : 01 安息日が終わると、**②**マグダラのマリア、**①**ヤコブの母マリア、**③**サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。

< 4 > ヨハネによる福音書 19 : 25 イエスの十字架のそばには、**①①**その母(→イエスの母マリア)と**④②**母の姉妹、**⑤**クロパの妻マリアと**②③**マグダラのマリアとが立っていた。

→①~③と読めば、3人、**①④⑤②**と読めば、4人と読むことができる。

< 5 > **④**はイエスの母マリアの姉妹となり、文脈から言って、**③**「サロメ」と解釈できる(イエスの母マリアとサロメは姉妹関係)。

【参考】 イエスの十字架の時、そばにいた人たち(人名等は聖書の記述順)

マタイによる福音書	27 : 56	① マリア(→子: イエス、小ヤコブ、ヨセ(ヨセフ)、ユダ、シモン) ② マグダラのマリア ③ ゼベダイの子(大ヤコブ、弟のヨハネ)らの母サロメ
マルコによる福音書	15 : 40	② マグダラのマリア ① 小ヤコブとヨセ(=ヨセフ)の母マリア ③ サロメ(→ゼベダイの子である大ヤコブと使徒ヨハネの母なるマリア)
ヨハネによる福音書	19 : 25	① マリア(←その母) ④ 母の姉妹 ⑤ クロパの妻マリア ② マグダラのマリア

回復訳: イエスの母の姉妹でクロパの妻マリア
→母の姉妹=クロパの妻マリアとが同じ人

【参考】 ゼベダイの子ヤコブ(=大ヤコブ)とヨハネ

「十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。」(マタイによる福音書 10 : 2~4)

ヤコブ: 大ヤコブ(ゼベダイの子) Jacobus

→James 「かかとを掴む者」(ヘブライ語) ゼベダイの子、漁師/ガリラヤ出身/ヨハネの兄(最初の殉教者)

ヨハネの兄で「ゼベダイの子ヤコブ」である。「アルファイの子ヤコブ」と区別するため「大ヤコブ」(年長のヤコブ)とも呼ばれる。父はゼベダイ、漁師であった。弟のヨハネと共にガリラヤ湖畔で網の手入れをしていたところをイエスに呼ばれ、そのまま父と雇い人を残して弟のヨハネと共に弟子になった。二人はともに血気盛んで向こう見ずなところがあり「ボアネルゲス」(雷の子ら)と呼ばれていた。イエスが捕らわれる直前、オリーブ山のゲツセマネに向かった時に、ヨハネ、ペトロと同行した。しかし、イエスの苦悩の祈りをよそに眠り込んでしまった。

→キリストの死後、6年間スペインに行き布教活動を行った。エルサレムに戻るとキリスト教徒への迫害はすざましく、「使徒言行録」12:2によるとユダヤ人の歓心を買おうとしたヘロデ・アグリッパ1世によって捕らえられ、殉教(斬首)した。使徒の中で最初の殉教者である。

彼の弟子達はパレスチナを離れ、遺骸をスペインのコンポステラ(campus stellae: 星の野原)に運んだとされている。

ヨハネ(ゼベダイの子) Johannes

→John「神は慈しみ深い」(ヘブライ語) ゼベダイの子、漁師/ガリラヤ出身/大ヤコブの弟
ゼベダイの子で大ヤコブの弟、ガリラヤの漁師の子。イエスを洗礼した洗礼者ヨハネの弟子。洗礼者ヨハネと区別するために特に「使徒ヨハネ」と呼んだり、「ゼベダイの子ヨハネ」「福音記者ヨハネ」と呼ぶこともある。ヤコブ、ペトロと共にイエスの一番弟子であり、常にイエスと行動を共にした。兄弟ともに性格が激しく、勝ち気で、自分こそイエスの一番の弟子だと考え、仲間たちから〈ボアネルゲス〉(雷の子ら)とあだ名をつけられた。イエスが十字架にかけられたときも弟子としてただ一人、十字架の下にいた。また、イエスの墓が空であることを聞いてペトロとかけつけ、真っ先に墓にたどりついた。

イエスの母マリアを連れエフェソに移り住んだヨハネは、その後、パトモス島(エーゲ海に浮かぶギリシアの小島)に幽閉され、そこで「ヨハネの黙示録」を記した。十二使徒の中でただ一人殉教せず、95歳まで生きたとされる。

36 イエスが、「(ゼベダイの子ヤコブとヨハネよ、お前たちはわたしに) **何をしてほしいのか**」と言われると、

37 二人は言った。

「**栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。**」

→西洋のマナーは日本と逆の「右上位」(右上左下)。彼らの野望は、イエスの右の座(メシア的王国の最高位)に着くことである(右:ヤコブ、左:ヨハネ)。左の座は2番目の地位である。

【一言】 雛人形の左大臣・右大臣、日本の場合、どちらが高位?

左大臣、右大臣は天皇である男雛から見ての呼び方です。当時、左側が上位(→左上右下)なので(昭和から右上位に変更、京雛は左上位) 天皇である男雛から見て左側の左大臣の方が上位なので、左大臣が年配者、右大臣が若者です。三人官女以下の段も左側が上位ですので、男雛から見て左側に来るのが年配者の左大臣です。



左上右下

段飾りの最上段には、内裏雛の男雛(お殿さま)と女雛(お姫さま)を置く。普通は、向って左にお殿さま、右にお姫さまを飾ります。後ろに金屏風を立て、両脇に雪洞(ぼんぼり)、桃の花をさした瓶子(へいし)をのせた三方(さんぼう)飾りを置く(京風は男雛と女雛の並びが逆)。男雛の冠は、纓(えい)をまっすぐ立て、笏(しゃく)は右手に持つ。太刀(たち)は左の腰の袖の下に入れる。女雛の絵扇(ひおうぎ)は、開いて手にもたせる。

←京都御所等、伝統的な建造物は南向きに建てられた。

38 イエスは(二人の無知さにあきれて)言われた。

「**あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。**」

→ここでは、「杯」は苦しみ、神の怒りの象徴(比喩的表現)で、「杯を飲む」とは、苦しむこと、神の怒りの裁きを受けることを意味する。ここでは、「洗礼」も「杯」と同義で使われている(ルカ 12:50)。

39 (そして)彼らが、(何も分かっていないのに、単に)「**できます**」と言うと、イエスは言われた。

「**確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。**」

40 **しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。**」

41 ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。

42 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。

「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。

43 しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者（→ギリシア語：ディアコノス＝執事）になり、44 いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。

45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

→身代金（ギリシア語で「ルトロン」：贖いの代価）は、しばしば奴隷や囚人を解放するための代金を意味する。

→新約聖書にある「身代金」

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 3 / 聖句等の総数 33250 <身代金>3個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: 身代金]
S マタイによる福音書	20:28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」	
S マルコによる福音書	10:45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」	
S コリント信徒への手紙 I	7:23 あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。人の奴隷となつてはいけません。	

→新約聖書にある「仕える者」（一部）

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 6 / 聖句等の総数 33250 <仕える者>6個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: 仕える者]
S マタイによる福音書	20:26 しかし、あなたがたの間では、そうであつてはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、	
S マタイによる福音書	23:11 あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕える者になりなさい。	
S マルコによる福音書	9:35 イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」	
S マルコによる福音書	10:43 しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、	
S ルカによる福音書	22:26 しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。	
S エフェソの信徒への手紙	3:7 神は、その力を働かせてわたしに恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。	

→聖書にある「人の僕」

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 2 / 聖句等の総数 33250 <人の僕>2個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: 人の僕]
S マルコによる福音書	10:44 いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。	
S ルカによる福音書	19:13 そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。	

【参考】 最高法院 サンヘドリン sanhedrin

ローマ帝国支配下のユダヤにおける最高裁判権を持った宗教的・政治的自治組織（ユダヤ議会）、最高律法教育機関でエルサレム神殿内に置かれた。

メンバーは、71人で構成（議長一世襲制の大祭司と副議長が各1人、議員69人、計71人）された。「最高法院」「長老会」などで新約聖書に登場する。→下記【参考】1、2参照

①モーセが神の命令によって召集した70人の長老に起源を持つとされる（民数記11:16、ユダヤ教のラビ伝承）。

→民数記11:16 主はモーセに言われた。「イスラエルの長老たちのうちから、あなたが、民の長老およびその役人として認めうる者を七十人集め、臨在の幕屋に連れて来てあなたの傍らに立たせなさい。

②権限等については、ギリシア語資料（新約聖書）とヘブライ語資料（タルムード伝承）のいずれに依拠するかによって説が異なるが、**①宗教問題を扱う部門**と**②政治問題を扱う部門**とに分れていたとする説が有力である。

③メンバーは、**①サドカイ派**（→【参考】3）を代表とするの**貴族祭司長**（祭司長は、神殿の中での祭儀、財政、警察を担当し、最高法院の中枢であった）のグループ、**②ファリサイ派**（→【参考】4）を代表とする**律法学者のグループ**、**③長老**（一般人の代表者、経済的に余裕を持った年配の人で、祭司長と密接な関係を持ち、指導的立場にあった）のグループの三グループから構成されていた。

④会合は、安息日や祝祭日を除き、朝のいけにえを捧げる時（AM8時半頃？、AM9時：朝の祈り）から夕刻のいけにえを捧げる時（PM2時半頃？、PM3時：夕の祈り）に行われた。

→ユダヤでは、神殿ないし会堂での祈りが日に3度（AM9時、正午、PM3時）行われた（朝と夕の祈りは必須、正午の祈りは任意）。

⑤司法（裁判）権を行使し、刑の執行を行なうこともできた（イエスが裁判にかけられたころには、死刑宣告をする権限はローマによって剥奪されていた）。

⑥神殿祭儀の監督指導を行ない、祭司や裁判官の任命も行った。

⑦新月と閏（うるう）年の宣言、ユダヤの祝祭日を決定する権限も持っていた。

※AD70年の神殿崩壊後は各地を転々、200年頃からは、ローマ帝国の皇帝テオドシウス帝（在位：AD379～395）によって祭司政治が廃絶されるまで、ティベリアス（AD20年頃、ヘロデ大王の子ヘロデ・アンティパスにより、破壊された村の跡地に建設され、ガリラヤ地方の首都となった。アンティパスの後見人であったローマ皇帝、ティベリウスに因んでティベリアスと名付けられた。→ヨハネによる福音書6:1、23、21:1）におかれ、ローマ帝国内のユダヤ人の政治的、宗教的生活の中心となった。

【参考】 1. 四福音書にある「最高法院」「長老会」

マタイによる福音書	5:22 しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。
マタイによる福音書	26:59 さて、祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にしようとしてイエスにとって不利な偽証を求めた。
マルコによる福音書	14:55 祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。
マルコによる福音書	15:1 夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。
ルカによる福音書	22:66 夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まった。そして、イエスを最高法院に連れ出して、
ヨハネによる福音書	11:47 そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。」

【参考】2. 使徒言行録にある「最高法院」「長老会」

使徒言行録	5:21 これを聞いた使徒たちは、夜明けごろ境内に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの長老会全体を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。
使徒言行録	5:27 彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。
使徒言行録	5:41 それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、
使徒言行録	6:12 また、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動して、ステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行った。
使徒言行録	6:15 最高法院の席に着いていた者は皆、ステファノに注目したが、その顔はさながら天使の顔のように見えた。
使徒言行録	22:5 このことについては、大祭司も長老会全体も、わたしのために証言してくれます。実は、この人たちからダマスコにいる同志にあてた手紙までもらい、その地にいる者たちを縛り上げ、エルサレムへ連行して処罰するために出かけて行ったのです。」
使徒言行録	22:30 翌日、千人隊長は、なぜパウロがユダヤ人から訴えられているのか、確かなことを知りたいと思い、彼の鎖を外した。そして、祭司長たちと最高法院全体の召集を命じ、パウロを連れ出して彼らの前に立たせた。
使徒言行録	23:1 そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」
使徒言行録	23:7 パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。
使徒言行録	23:15 ですから今、パウロについてもっと詳しく調べるといふ口実を設けて、彼をあなたがたのところへ連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください。わたしたちは、彼がここへ来る前に殺してしまう手はずを整えています。」
使徒言行録	23:20 若者は言った。「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるといふ口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることになっています。」
使徒言行録	23:28 そして、告発されている理由を知ろうとして、最高法院に連行しました。
使徒言行録	24:20 さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。

【参考】3. 富裕層の支持が多いサドカイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して柔軟

サドカイ派は、その名を祭司の主流派であるツアドク（ザドク）に由来し（サムエル記下 20：25、列王記上 1：38～44）、神殿詣（神殿信仰）に重点を置き、そこで犠牲を献げることを教えた。裕福な上流社会のユダヤ人（サムエル記下 20：25、列王記上 1：39～45）－祭司、教養のある金持ち、そして貴族に属する人々－でファリサイ派と対立した。彼らはモーセ五書（トーラー）をファリサイ派のような多くのこじつけの議論や問題に陥ることなく非常にまじめに解釈した。ファリサイ派との違いは、サドカイ派は神が人々を死後によみがえらせることが律法に記されていないことから、死後の世界や復活を信じず、終末論の死後の世界に対する信仰もなかった。サドカイ派はファリサイ派と異なり、あまり人気がなく、大衆の支持がなかったが、宗教と政治の面では力があり、非常に影響力があった。

【参考】4. 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム（＝ギリシア風）文化に対して否定的

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのはファリサイ派で、現代のユダヤ教の諸派もほとんどがファリサイ派に由来している。ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、死後の世界を信じ、律法を守ること、特に安息日や断食

(週2回、木曜日と金曜日)、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者(モーセ五書〈トーラー〉－創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記－を研究する学者)の多くがファリサイ派に属し、聖書(旧約)の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者(ラビ rabbi)を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシム」＝「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した(ヨハネによる福音書9:22)。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった(ヨハネによる福音書3:1)。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ(マタイによる福音書26:1~5、マルコによる福音書14:1~2、ルカによる福音書22:1~6、ヨハネによる福音書11:45~57)。

エルサレム神殿の崩壊(AD70年)後はユダヤ教の主流派(神殿に拠っていたサドカイ派は消滅)となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていた。

※1: BC 140年頃から BC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。

フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいる。